

## 試論「動詞連用形＋動詞連用形」複合語之語意・用法

陳世娟

東吳大學日本語文學系助理教授

### 摘 要

「動詞連用形＋動詞連用形」型之複合語可分為有動詞形及沒有動詞形兩大類。本論文的目的如下：首先 1) 依據前項(V1)和後項(V2)之結合關係做分類，然後 2) 利用品詞角度分析「動詞連用形＋動詞連用形」型之複合語在實際的句子中之使用狀況，3) 最後釐清這類語彙內部所蘊含的語意和其語法上之特徵。

考察結果如下：「上げ下げ」「泣き笑い」這類語彙內部，因為蘊含著「～たり～たりする」的動作性，所以較易產生動詞化的現象。另外，當作形容詞和形容動詞使用時，後項要素很明顯有許多「～たて」「～掛け」「～あがり」「～がち」「～過ぎ」「～っぱなし」這類語彙出現。這些「接尾詞化」的成分，製造了許多的複合語。這類語彙蘊含某種「狀態、樣子或是傾向」等「相」之涵義，於是附帶產生了形容詞性的性質(屬性)。這正是其形容詞化時語意和結構上所觀察到之特徵。

**關鍵詞：**動詞連用形      複合語      品詞轉化      結合關係  
語意      句法      動詞化      形容詞化



# 「動詞連用形＋動詞連用形」複合語の意味・用法について

陳世娟

東呉大学日本語文学系助理教授

## 要 旨

「動詞連用形＋動詞連用形」型の複合語は、動詞形のあるものと動詞形のないものに分かれる。本稿では、このタイプの複合語について、まず、1) 前項 (V1) と後項 (V2) の結合関係による分類を試みる。そして、2) 品詞の観点から「動詞連用形＋動詞連用形」型の複合語が実際の文中では、どのように使われているかを分析しながら、3) その内部における意味的・統語的な特徴を究明することを目的とする。

結果は次の通りである。「上げ下げ」「泣き笑い」のような語の内部には、「～たり～たりする」といった動作性が潜在しているため、動詞化しやすくなる。また、形容詞的なものと形容動詞として働くものの場合、後項 (V2) には、「～たて」「～掛け」「～あがり」「～がち」「～過ぎ」「～っぱなし」の類の語が目立っている。これらの語は接尾辞化して、多くの複合語を生み出している。ここには「ある状態、様子、傾向」などの「相」が含意されているため、形容詞的な性質（属性）が生じたと考えられる。この点は、「動詞連用形＋動詞連用形」型の複合語の形容詞化する仕組みの特徴だといえる。

キーワード： 動詞連用形 複合語 品詞転成 結合関係  
意味的 統語的 動詞化 形容詞化



# **A Tentative Study of the Meanings and Usages of Verbal Rennyoukei + Verbal Rennyoukei Coumpunds**

Chen, Shyh-Jang

Assistant Professor, Department of Japanese Language and Culture,  
Soochow University

## **Abstract**

The Compounds of Verbal Rennyoukei + Verbal Rennyoukei can be divided into two types: with or without verbs. The purpose of this study is first to classify according to the linking relationship of the former (V1) and the latter (V2), then to analyze the practical usages of Verbal Rennyoukei + Verbal Rennyoukei compounds in sentences according to word classification, and last, to clarify the internal meanings and their syntactic characteristics.

The results are as follows: words like 「上げ下げ」「泣き笑い」 are easily to become verbalized because they contain the action quality of 「～たり～たりする」. And when used as adjectives and verbal adjectives, many words like 「～たて」「～掛け」「～あがり」「～がち」「～過ぎ」「～っぱなし」 may appear. These suffix elements bring about many compounds. These words contain meanings such as status, appearance or tendency and they acquire the characteristics of adjectives. These are the semantic and structural characteristics we observe when these words are used as adjectives.

**Key Words:** Verbal Rennyoukei

Compounds

Parts of Speech Transformation

Combining Relationship

Semantics

Syntactic

Verbalize

Adjectivalize



# 「動詞連用形＋動詞連用形」複合語の意味・用法について

陳世娟

東呉大学日本語文学系助理教授

## 1. はじめに

野村（2010）では、語構成（単語の組み合わせ）の大切さを次のように語っている。

子どもにかぎらず成人でも、たえず、自分の知らない、あたらしいことばと接触している。新聞などでは、毎日のように新語がうまれている。それでも、コミュニケーションに支障が生じないのは、その大部分が既存の単語のくみあわせによる複合語だからである。（波線は筆者による）

野村が述べているとおり、複合語は日本語の体系の中で、日々生み出され多用されているという現実がある。このため、複合語の結合パターンは多様となり、現行の辞書には掲載されていないものも少なくない。よって、日本語学習者にとって、このような語彙を理解し習得するためには、その単語の組み合わせのメカニズムや体系的な知識が必要であると思われる。

本稿では（1）～（6）のような「動詞連用形＋動詞連用形」型<sup>1</sup>の複合語を対象に考察を行う。

- （1）茨城の片田舎の高校一のおちこぼれが、魚や・行商・すし屋の出前からスタートし、挫折し、泣き笑いの失敗を繰り返し

---

<sup>1</sup> 動詞連用形を後項要素とする複合語のパターンには、「名詞＋動詞連用形」「動詞連用形＋動詞連用形」「形容詞語幹＋動詞連用形」「形容動詞語幹＋動詞連用形」が見られる。ほかに、「副詞＋動詞連用形」（転た寝、ぎゅうぎゅう詰め、きりきり舞い、ぐしょ濡れ、びしょ濡れ、ポイ捨て、がた落ち）や「接続詞＋動詞連用形」（但し書き）もあるが、少数に限る。



ながら、ついに上場寸前の《すし勢》などの飲食業チェーンのオーナーへ。(BCCWJ<sup>2</sup>)

- (2) その中の慶事ですから、めでたい環境の中で発表したいのでしようけれども、庶民はその有象無象の中で、泣き笑いしながら生きていっているのです。
- (3) 「こいつ…オーバーなんだよ」銀平がうれしそうに泣き笑いをした。
- (4) これから左膳は、布河の訊問を行ない、この場で洗い浚い吐かせるつもりである。
- (5) 定期購読という形で賛助金を巻き上げ、雑誌を押し売りするブラックジャーナリズムである。
- (6) 翌朝、二人とも北君に奢るのはもう懲り懲りだとか言ってすげなく帰って行ってしまった。

(1) ～ (3) は「泣き笑い」の用法であり、(1) は形容詞的に、(2) は動詞的に働き、(3) は目的語として働いているので、名詞である。また、(4) の「洗い浚い」は副詞的に、(5) の「押し売りする」は動詞的な機能を果たしている。さらに、(6) の「懲り懲り(こりごり)」のような「動詞連用形」の重複形の語も見られる。このように、「動詞連用形+動詞連用形」の複合語は、名詞として用いられるだけではなく、形容詞的に、動詞的に、副詞的にも用いられる。(1)～(6) のそれぞれの語は、(7) のような動詞形は存在しない。しかし、(8) のように、動詞形が存在しているものもある。

- |                |            |
|----------------|------------|
| (7) 泣き笑い→*泣き笑う | 洗い浚い→*洗い浚う |
| 押し売り→*押し売る     | 懲り懲り→*懲り懲る |

---

<sup>2</sup> BCCWJ とは『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese, 略称 BCCWJ) である。以降、本稿で扱う、BCCWJ を利用して集めた用例については、出典の表記を省略する。なお、下線は筆者による。



- |              |            |
|--------------|------------|
| (8) 見覚え→見覚える | 受け入れ→受け入れる |
| 出合い→出会う      | 取調べ→取り調べる  |

このように、「動詞連用形＋動詞連用形」型の複合語は、動詞形のあるものと動詞形のないものに分かれる。本稿では、このタイプの複合語について、まず、1) 前項 (V1) と後項 (V2) の結合関係による分類を試みる。そして、2) 品詞の観点から「動詞連用形＋動詞連用形」型の複合語が実際の文中では、どのように使われているかを分析しながら、3) その内部における意味的・統語的な特徴を究明することを目的とする。

## 2. 先行研究

長嶋(1976)では、複合動詞の名詞化(派生名詞)の問題について、次のように述べている。

冒頭に、「暮れ残る」という複合動詞を用いた芥川の「辞世」の句を挙げた。この複合動詞からは、「暮れ残り」という名詞形を作ることとはできない。同様に、「焼け残る」にも「焼け残り」という名詞形はない。しかし、同じ「残る」を後項動詞とする複合動詞、たとえば「居残る」「売れ残る」「勝ち残る」「生き残る」等からは、それぞれ、「居残り」「売れ残り」「勝ち残り」「生き残り」などの名詞形を作ることができる。

また、「反対に、名詞形はあってもそれに対応する動詞形がないものもある。たとえば、「立ち食い」とは言うが、「立ち食う」とは言わない。また、「立ち読み」はあるが「立ち読む」という形はない。これらの例において、我々は直感的に言うか言わないかの判断ができる。そこには何らかの規則が働いているのであろうが、今の所わからない」と述べている。このように、複合動詞から派生名詞ができる場合とできない場合があるが、「立ち食い」と「立ち読み」に対応す



る動詞形がないことに何らかの規則が作用しているかを調べる必要がある。

この点について、石井（2007）は「複合動詞形成の《アスペクト・ヴォイス》モデル」の立場から、二つの動詞の結びつきが複合動詞として成立するための必要条件として、複合動詞の基本的な語構造である[過程結果構造]のもつ「実現性」と「時間性」という特徴を提示している。しかし、複合名詞の場合には逆にそのような関係を持つものが乏しいため、「立ち食い」は「立った状態で…を食うこと」、「立ち読み」は「立ったままで…を読むこと」のように解釈し、前者と後者の関係には「実現・結果性」も「過程性」もないので、CNにしかならないと説明している。

嶋田（1989）は、複合動詞（CV）と複合名詞（CN）の意味的相違について詳しく論じている。「乗り逃げ」のようにそれ自体では名詞にしかならず、動詞を作るためには「する」を補う必要があるものを「複合名詞」とする。それと区別して「派生名詞」（複合動詞から派生した名詞）がある。また、このような複合名詞をその意味関係によって、「特殊なもの」「合成的なもの」「不透明なもの」の三種類に分けている。さらに、「合成的」については「一体化した意味」をもつものともたないものとに分類したうえで、「(a)不透明な意味をもつもの、または、(b)合成的でしかも一体化した意味をもつものは動詞になり、(c)その他(一体化していないものと特殊なもの)は名詞になる」という結論を提示している。

また、石井（2007）では、V+Vタイプの複合動詞から派生した名詞形にも、もとになった複合動詞に表す動きを〈ことがら〉として表したり（追い越し、飛び込み、…）、そのうごきの結果としての〈もの〉（切り抜き、積み残し、…）や〈ありさま〉（落ち着き、仕上がり、…）を表したり、さらにはそのうごきに関係する〈もの〉としての〈主体〉（付き添い、見習い、…）〈道具〉（切り出し、突っ掛け、…）、〈場所〉（受け付け、突き当たり、…）、〈時〉（締め切り、…）などを表したりするものを見出すことができると述べている。

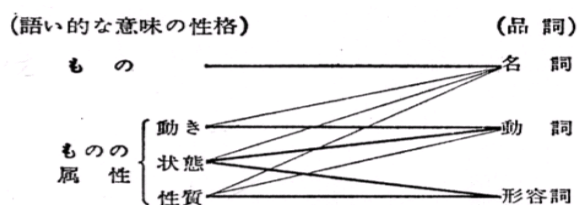


また、このような複合名詞は、連用形転成名詞(いわゆる居体言)どうしが結合したものではない。それは、まず、二つの動詞が結合して、全体としてひとまとまりの「運動」をつくりあげ、次いで、その「運動」が上に述べた名詞としての意味(「ことがら」「もの」「ありさま」など)に転化したものと考えることができるとしている。つまり、動詞形のあるものは「派生名詞」で、動詞形のないものは「複合名詞」である。それぞれ本来の構成の違いが存在しているため、両者を区別すべきであると指摘している。

影山(2002)では、名詞を意味の観点からモノ名詞(具体的あるいは抽象的なモノを表わす名詞)とデキゴト名詞(動作や出来事や状態を表わす名詞)に分類している。動詞から派生した名詞は、基本的にすべてがデキゴト名詞であるとし、日本語はケジメ(輪郭)がないということ自体が1つの特徴なので、その特徴をうまく利用して、新しい表現を創り出すことがあるとしている。このように、「複合語」が多く生じると指摘している。

品詞の観点については、鈴木(1972)村木(2002)があげられる。鈴木(1972)では、「名詞の語意的な意味の範囲はひじょうにひろく、動詞や形容詞と同様に、動き、状態、性質をもさししめすことができるが、その中心をなすのは、具体的なもの(実体)をさししめす意味である。そして、この名詞の中心をなす語意的な意味の性格が、名詞の文法的な特性を発達させる基礎、根拠としてはたらいっているのである」と述べ、名詞、動詞、形容詞の関係を次の図1のように示している。

図1 名詞、動詞、形容詞の関係



(鈴木 1972 : 176)

村木(1996)(1998)(2000)(2002)では、意味と品詞分類の視点



から一連の研究がある。村木（2002）は、「品詞間の連続性」について、「主要な品詞である名詞・動詞・形容詞といった単語群にあっては、その統語的機能が単一ではなく、いくつかの機能をあわせもっているのである。すなわち、統語的機能の点で、それぞれが固有の機能を持ち、きれいに他から独立する関係にあるのではないということである。それぞれが主要なはたらきと副次的なはたらきをそなえていて、いわば相対的に分類されるということである。そのため、ときに、ある品詞と別の品詞との関係は連続的でもあり、部分的にかさなる場合もある」と述べている。また、「第三形容詞」の概念を提唱し、その単語は、述語としてもちいられるとき、属性を意味し、形容詞としての特徴が発揮されると説明している。「動詞連用形＋動詞連用形」型の複合語には、形容詞として働く「第三形容詞」に属する単語も少なくない。

以上の先行研究を踏まえて、「動詞連用形＋動詞連用形」複合語の意味特徴とその用法を考察していく。

### 3. 動詞連用形の位置づけ

日本語の動詞の基本的な活用形のひとつである連用形は、多様な意味・用法がある。一般的に、「中止形」として文中の接続機能を果たしたり、複合語の成分として働いたりすることが多いが、そのまま「名詞化」して単独で名詞として使えるものもある<sup>3</sup>。たとえば、「遊ぶ→遊び」「働く→働き」「流れる→流れ」「香る→香り」「匂う→匂い」のように、「動詞連用形」は名詞として使われる。一方、「干す→\*干し」「打つ→\*打ち」「着る→\*着<sup>4</sup>」のように、単独では名詞として用いられないが、造語成分としてほかの語と複合することが

<sup>3</sup> 玉村（1970）は、名詞化の難易について①単音節動詞（単音節連用形）は名詞化しにくい②単独の形でよりも、複合形式の方が名詞化されやすい③動詞に対応する名詞として、漢語が頻用される場合は名詞化しにくいと指摘している。

<sup>4</sup> 「着る」の連用形「着」は、「着の身着のまま」のような連語的な用法はあるが、「遊び、働き、流れ、香り、匂い…」のように、単独で名詞化できるものではない。



できるものもある。

- (9) ～干し 「日干し、陰干し、虫干し、物干し」  
干し～ 「干しえび、干し柿、干し竿」  
(10) ～打ち 「手打ち、頭打ち、網打ち」  
打ち～ 「打ち合わせ、打ち上げ、打ち切り、打ち消し」  
(11) ～着 「遊び着、晴れ着、厚着、薄着、重ね着、雨着」  
着～ 「着替え、着こなし、着流し、着物」

(9) ～ (11) のように、「動詞連用形」は複合語の前項要素や後項要素として使われ、多くの言葉が誕生している。しかし、辞書によっては、名詞形が掲載されていないか、語形のみ記載されている場合もよくある<sup>5</sup>。

谷口 (2006) は、「動詞連用形は動詞の一活用形ではあるが、かなり広範囲な用法を持ち、日本語の表現を豊かなものにしているとみることでもできよう。しかしその反面、日本語らしい日本語の習得をめざす学習者にとっては、そのことはひとつの壁となっているのかもしれない」と指摘している。「動詞連用形」は日本語の構成面のみならず、日常語や専門用語の面でも、大変重要な要素であることは言うまでもない。(12) (13) (谷口 2006 (1) (2) の例) のように、日常の料理名(メニュー)などは、動詞連用形なくしては成り立たないといえる。

(12) 焼きそば/野菜いため/厚揚げ/ゆで卵/おひたし/釜あげうどん/...

(13) ?焼いたそば/?いためた野菜/?厚く揚げた(豆腐)/?ゆでた卵/ひたした(野菜)/?釜であげたうどん/...

---

<sup>5</sup> たとえば、「立ち働き」「言い違え」「居座り」などは、『大辞林』にも『大辞泉』にも掲載されていない。また、『大辞林』『大辞泉』においては、「見知り」には、「顔見知り」の例が見られる。一方、『新明解国語辞典』(6版 2005) では「見知る」が掲載されているが、「見知り」が掲載されていない。その代わり、見出し語として「人見知り」「顔見知り」が掲載されている。



また、「相撲用語」においても、「動詞連用形」が非常に大切な要素として活躍している。単純語も見られるが、複合語の場合がほとんどである<sup>6</sup>。

なお、玉村(1985)では、日本語の複合語の統語構造について全部で19の種類に分類されている。谷口(2006)もすでに指摘しているように、これら複合語の語構成全19種のうち、動詞連用形を含むものは(14)のように、8種類を占めている。このことから、動詞連用形は日本語の複合語の成立にかなり重要な役割をはたしているといえる。

- (14) a. N+V 型：山歩き/川開き/卵焼き/夜遊び/里帰り/...
- b. V+V 型：勝ち誇る/逃げのびる/申し込み/売り上げ/...
- c. NA+V 型：馬鹿騒ぎ/きれい好き/急ごしらえ/...
- d. A+V 型：浅づけ/くやし泣き/遠まわり/長生き/...
- e. AD+V 型：よちよち歩き/ぐるぐる巻き/きりきり舞い/...
- f. V+NA 型：話し上手/聞き上手/使い勝手/...
- g. V+A 型：住みにくい/読みやすい/話しづらい/...
- h. V+N 型：買い物/焼き物/落ち葉/教え子/決まり文句/...

このように単純和語動詞連用形は、日本語の形成面においては非常に豊かな用法をもつ大切な成分の一つである。

#### 4. 考察対象と分類

##### 4.1 考察対象

本稿では、「動詞連用形+動詞連用形」は文中でどのように使われているかを見るため、品詞的な働きを中心に考察を行う。考察するにあたって、『教育基本語彙の基本的研究－増補改訂版』（2009）に

<sup>6</sup> 相撲のきまり手は、通称四十八手と呼ばれるが、実際にはそれより多いといわれている。たとえば、「突き出し、押し出し、引き倒し、寄りきり、送り出し、寄り倒し、すくい投げ、浴せ倒し、…」のような複合語がほとんどである。  
<http://sumo.goo.ne.jp/kimarite/index.html>



ある「語彙表」から「動詞連用形＋動詞連用形」を抽出し、合計 675 の語を収集した。まず、これらの語を『大辞林』『大辞泉』<sup>7</sup>を利用して、それぞれの品詞を確認した。そのうち、品詞表示のない語を『中納言』で用例があるかどうかによって、それぞれの品詞と確認をした。たとえば、「言い直し、居座り、聞き流し、伸び悩み、行き掛け、待ち惚け…」がある。また、「肥溜め、氷滑り、錆止め、螺子回し」のように、「肥、氷、錆、螺子」はすでに[名詞]として定着しているものであるため、考察対象から外す。

#### 4.2 西尾(1961)(1988)と嶋田(1989)の分類

西尾(1961)(1988)は「動詞連用形＋動詞連用形」の複合名詞を次の3種に分類している。

- (15) (I) 複合名詞と対応する複合動詞があるもの  
「乗り換え・組み合わせ」
- (II) 複合名詞と対応する複合動詞が現在では普通には使われないもの(このパターンの例の場合、意味上は多くの場合に上の連用形が連用修飾的に下の連用形にかかっているもの)  
「崩し書き、押し売り、食い逃げ、立ち食い…」
- (III) 対比的な概念を表す動詞の連用形二つが並列関係にあるもの  
「貸し借り、乗り降り、上げ下げ…」

嶋田(1989)は、複合名詞の意味を構成素の関係によって、「乗り逃げ」のように修飾部と主要部からなるものと「上げ下げ」のように並列の関係にあるものとに分類している。前者の場合、意味的には、主要部 V2 がある種の行為を示し、修飾部 V1 がその行為の行われ方

<sup>7</sup> Yahoo 辞書の『大辞泉』(小学館)と『大辞林』(三省堂)を利用する。  
<http://dic.yahoo.co.jp>



を細かく指定する役割を果たす。また、V1 と V2 にはこのような意味関係があるにもかかわらず、CN 全体としての意味は、構成素である V1 と V2 の意味とその修飾関係に分解できない特殊な意味を含んでいる。さらに、V1 と V2 が対等の関係で並列する CN の場合にも、それぞれの構成素に割り当てることができない意味が存在する。どちらの分類においても、CN 全体としては部分の意味からは予測できない程、豊富で特殊な意味を担っているとしている。その分類は (16) のように整理できる。

(16) (i) 「修飾部＋主要部」の関係にあるもの

「立ち食い、立ち読み」

(ii) 並列の関係にあるもの

① 反意語の並列 「浮き沈み、寝起き」

② 類義語の並列 「飲み食い、見聞き」

(iii) 意味の特殊性があるもの

「切り売り、乗り逃げ」

#### 4.3 本稿における「動詞連用形＋動詞連用形」の分類

本稿は、西尾 (1961) (1988) と嶋田 (1989) の分類を参考に、『教育基本語彙の基本的研究－増補改訂版』(2009) にある「語彙表」から「動詞連用形＋動詞連用形」を抽出した 673 語を、①動詞形がある否か②結合関係③特殊な語形のもの、を基準に大別して、それぞれ (A) と (B)、(C) と (D)、(E) と (F) のように分類することにした。以下の 6 種類に分けてみた。

(17) ① (A) 名詞形と対応する動詞形があるもの

「受け取り、出過ぎ、引き続き、見積もり、呼び出し…」

(B) 名詞形のみのも

「覚え書き、見殺し、食い上げ、在り来り、負け嫌い…」

② (C) 並列関係にあるもの(ほとんど対義語の並列)



「貸し借り、上げ下げ、浮き沈み、寝起き、泣き笑い…」

(D) 修飾関係にあるもの

「切り売り、押し売り、食い逃げ、立ち食い…」

③ (E) 動詞連用形重複形のもの

「懲り懲り、離れ離れ、散り散り、折々…」

(F) 促音が両要素の間に入っているもの

「明けっ放し、取っ付き、酔っ払い…」

以下、これらの語は品詞的にどのように振舞うか、用例を通して考察した結果を述べる。

## 5. 考察結果

### 5.1 品詞別にみる「動詞連用形＋動詞連用形」

本稿では、V2+V2 複合語の意味・用法に注目して考察を行った。主に品詞の観点から「動詞連用形＋動詞連用形」複合語がそれぞれ文中においてどのように振舞うのかを考察した。その結果は表 1 と図 2 の通りである。

表 1 品詞別にみる V2+V2 複合語

V2+V2 複合語		
品詞別	673	
名詞	666	98.96%
動詞的	143	21.25%
形容詞的	105	15.60%
形容動詞	20	2.97%
副詞的	13	1.93%
完全名詞	409	60.77%

図 2 V2+V2 複合語の品詞別の分布

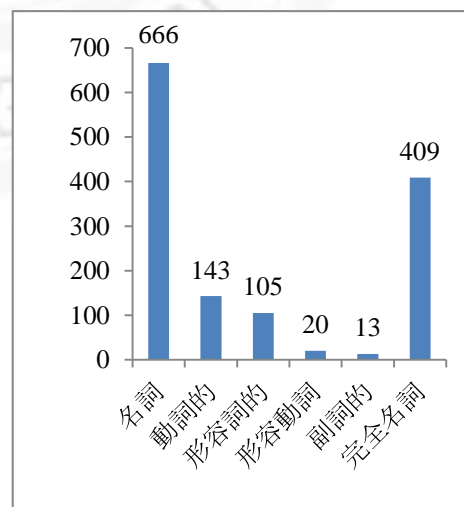




表 1 からわかるように、[名詞] が中心的な用法となるが、それぞれ異なった品詞として働くことがわかった。そのうち、動詞的に機能するものは 143 語 (21.25%)、形容詞的に機能するものは 105 語 (15.60%)、形容動詞は 20 語 (2.97%)、そして、副詞的に用いられるものは 13 語 (1.93%) あった。完全名詞は、[名詞] にしかならず、ほかの品詞転成が見られないものである<sup>8</sup>。さらに、動詞形があるか否かによって、それぞれの品詞的機能を考察してみると、表 2 のような結果が出た。

表 2 動詞形の有無による分類及び品詞の分布

V2+V2 複合語 (673)				
動詞形	ある		なし	
	488	72.51%	185	27.49%
名詞	487	99.80%	179	96.76%
動詞的	70	14.34%	73	39.46%
形容詞的	80	16.39%	25	13.51%
形容動詞	6	1.23%	14	7.57%
副詞的	7	1.43%	6	3.24%
完全名詞	327	67.01%	82	44.32%

表 2 からわかるように、V2+V2 複合語 (673 語) のうち、動詞形のあるものが 488 語 (72.51%) で、動詞形のないものが 185 語 (27.49%) あった。動詞的に働くものとしては、

動詞形のないもののほうが多く見られ、185 語のうち、73 語 (39.46%) あった。これは、動詞形のないものの特徴といえる。一方、形容詞的に働くものは、それぞれの割合がそれほど差はないようである。そして、わずかであるが、形容動詞として働くものはやはり動詞形のないものが目立っている。それぞれの品詞の分布は図 3 と図 4 で示すことができる。

<sup>8</sup> 673 語のうち、7 語のみ [名詞] にはならず、他の品詞にしか転成できないものが見られる。「取り分け、洗い浚い、有り勝ち、散り散り、離れ離れ、懲り懲り (こりごり)、懲り懲り (こりこり)」の 7 語である。よって、[名詞] になる語数は 666 語である。



図 3 動詞形がある複合語の品詞分布

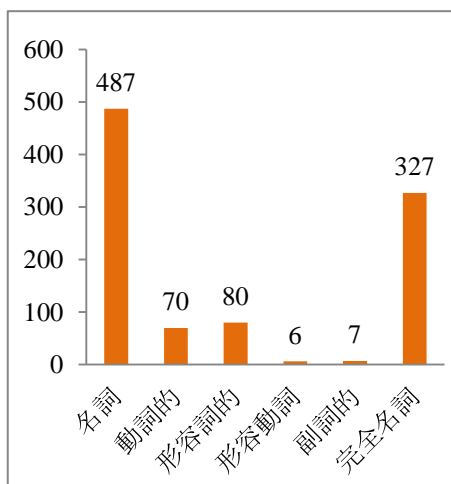
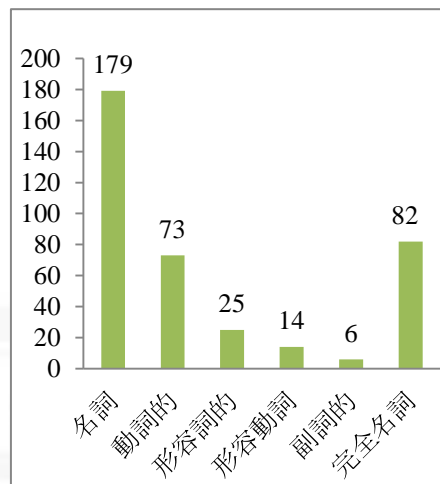


図 4 動詞形がない複合語の品詞分布



以下、品詞別にそれぞれの例を取りあげ、意味的に、形態的にどのような特徴があるのかを見ていく。

## 5.2 動詞として働くもの

「動詞連用形＋動詞連用形」の複合語には、以下のような語が見られる。

- (18) a. 生き残り、見覚え、書き取り、飛び降り、飛び乗り、組み立て、乗り換え、着替え、呼び出し…  
 b. 生き残る、見覚える、書き取る、飛び降りる、飛び乗る、組み立てる、乗り換える、着替える、呼び出す…

(18a) のような語はそれぞれ対応する動詞形 (18b) が存在している。このように動詞と名詞の対応が多く見られる<sup>9</sup>。これに対し、(19) のように名詞形はあるが、動詞形のない語も多く見られる。

<sup>9</sup>単純和語動詞連用形の名詞化と同様に、このような複合名詞は「動詞連用形転成名詞」「転成名詞」「居体言」などと呼ばれる。



- (19) 飛び入り 買い食い 摘み食い 覚え書き 読み書き  
 立ち食い 立ち読み 立ち飲み 泣き笑い 上げ下げ  
 浮き沈み 競り売り 投げ売り 切り売り 押し売り

動詞形のあるものには、その派生名詞を用いて「する」をつけて動詞的に働くものが 70 語あった。そこに動詞的な言い方と名詞的な言い方の相違が発生する。この点については、他稿に譲る。本稿では、動詞形のないものに注目して、その特徴を見ていく。

### 5.2.1 名詞形のもの

上掲した (19) は動詞形がないため、多くの語は「する」をつけて動詞的に機能することができる。たとえば、

- (20) 一葉日記によると、一葉宅にはさまざまな人が出入りしている。  
 (21) この A 邸に、父親の代から出入りしている植木屋がおり、そのとし、つまり事がおきたとしの春のある日、親方が、一人の徒弟をつれて A 邸の庭の手入れにやってきた。  
 (22) 起きている時間のほとんどをプレイに費やし、ゲーム内で寝起き、飲み食いし、ロドリゲスがいていたように、その世界に移り住みたいと考えている。  
 (23) となりで浮き沈みしながらついてくるのは、マヨネーズの赤いふただ。  
 (24) 女の方はヒアリングをむしろ楽しもうと、相手の話にアーハンアーハンと眉毛を上げ下げした。

(20) ～ (24) からわかるように、「出入り、寝起き、飲み食い、浮き沈み、上げ下げ」は並列関係にあるものである。このタイプの語はほとんど「する」をつけて動詞的に働くことができる。(20) の「出入り」という言葉は、「出ることと入ること／出たり入ったりすること」と解釈することができる。出ることと入ることという意味で



は、「車が出入りする」「出入り口」などのように、学習者には簡単に理解できる。しかし、(21)の「出入りしている植木屋」のような意味を理解するのは容易ではない。この場合は「出ることと入ること／出たり入ったりすること」と解釈することはできない。一方、(21)(22)の「寝起き」は、「寝ることと起きること／日常生活」のように解釈できる。「飲み食い」は「飲むことと食うこと／飲んだり食ったりすること／飲食」のように解釈できる。(23)(24)も、同様に、「浮いたり沈んだりすること／上げたり下げたりすること」のように解釈できる。

また、(25)～(30)は修飾関係にあるもので、それぞれ「摘まんで食うこと」「拾って読むこと」「量って売ること」になるが、意味の特殊化になる場合もある<sup>10</sup>。

- (25) 茶の間に戻ってきて、中尾は立ったまま餅菓子をつまみ食いしながら言った。
- (26) まあ、どこにでもある田舎の煮しめなのですが、これが実においしくて、学校から帰ってきて七輪の上にこれを見つけると、おやつがわりによくつまみ食いをしたものです。
- (27) 普通の図書館なら、ぶらぶらと歩いて目に留まった本を抜き出して、本を撫でてさすって{a.拾い読みをして／b.拾い読みして}、その本の持つ情報を感じようとする。
- (28) 短い話を、いくつか{a.拾い読みして／b.\*拾い読みをして}本を閉じると、それだけでもう気持ちがすっきり落ち着いている。
- (29) 「ジャックル浦島屋」(東京都八王子市、藤江豊社長)は、酒類やビール{a.10種類を量り売りしている。／b.10種類の量り売りをしている。}(毎日新聞 2003/05/21)
- (30) 沖縄市の「かおりや」は約20年前から、{a.香水の量り売

<sup>10</sup>「公金をつまみ食いする」は比喩的に、公けのものを少しずつ盗んで自分のものにすることをさしている。また、「拾い読み」は「字を一字一字たどって読む」という意味にも解釈できる。(『広辞苑』)



りをしている。／b.香水を量り売りしている。} (毎日新聞  
2003/05/21)

(25) (26) は「摘んで食うこと」のように解釈できるが、(27) (28) は文字通り「拾って読むこと」ではなく、「興味のある部分や必要なところだけをとびとびに読むこと」のように解釈しなければならない。(27a) の「拾い読みする」を (27b) の「拾い読みをする」に置き換えられるが、(28a) を (28b) に置き換えることができない。「短い話を、いくつか拾い読みをする」とすると、「短い話を」を受ける動詞が「する」になってしまって不自然なためである。(29) (30) は「量って売ること」の意味を表している。(29a) の場合は、「10種類を量り売りしている」を「\*10種類の量り売りをしている」に言い換え可能であるが、意味がやや不自然になってしまう。しかし、その前に「酒類やビール」という対象があれば、(29b) の「10種類の量り売りをしている」と言えるようになる。(30a) の「香水の量り売りをしている」は (30b) 「香水を量り売りしている」に言い換えられる。前者は、香水の「量り売り」に焦点が向けられるが、後者は、「量り売りする」の目的語「香水」に焦点が向けられる。この類の語は動名詞で[名詞] (「量り売り」) にも[動詞] (「量り売りする」) にもなる。

(31) 定期購読という形で賛助金を巻き上げ、{ a.雑誌を押し売りする／b.雑誌の押し売りをする } ブラックジャーナリズムである。

(32) 迷惑がっていることも知らず、a.親切の押し売りをする。  
このようなコンプレックスをメサイヤ・コンプレックスと言う。これは表面的には善意としてあらわれるので、克服することの難しいコンプレックスである」(『無意識の構造』前出) うがった言い方をすれば、弁護士とはメサイヤ・コンプレックスを職業化したようなものです。いかに弁護士とはいえ、ひどいメサイヤ・コンプレックスによって b.親



切を押し売りすることは顰蹙ものですが、メサイヤ・コンプレックスがゼロでビジネスだけという弁護士も気持ちが悪いものです。

(31a)「雑誌を押し売りする」は (31b)「雑誌の押し売りをする」に言い換えられる。動名詞「押し売り」の対象になる「雑誌」が明確に表示されているため、「押し売りする」を「押し売りをする」に言い換えられるのである。しかし (32a)「親切の押し売りをする」は連語のようなもので簡潔に表現されているため、「親切を押し売りする」に置き換えるより、しっくりする表現になっている。一方、(32b)は「親切を押し売りすることは顰蹙ものです」のように、「親切」に焦点が向けられているため、「親切の押し売りをする」に置き換えてしまうと作者の意図する「親切」に向けられた焦点がぼやけてしまうと考えられる。述語として働くときに、意味がさらに合成し語彙化されるため、その対象が述語とどう関連付けられるかが重要になってくるのであろう。

### 5.2.2 動詞的に働く理由として

5.2.1 で掲載した複合語の意味は、本稿における分類の (C) (D) に属しているものである。

(C) 並列関係にあるもの

「出入り、寝起き、浮き沈み、上げ下げ、…」

(D) 修飾関係にあるもの

「摘み食い、拾い読み、量り売り、押し売り、…」

(C) (D) が動詞的な用法として用いられる理由の一つとして、これらの語には「動詞形」がないため、「する」をつけて動詞的に機能するからである。影山 (1993) では、「語彙の阻止」について、次のように述べている。

語彙の阻止というのは、同義的な表現が既に存在するときには派生形を用いることができないという現象で、人間言語の経済



性を具現したものと見なされている。例えば、可能の「られ」は意味的に整合する限りどのような動作動詞にも付くが、例外的に「する」には付かない。(略) すなわち、辞書に登録されている「できる」が「\*しれる／\*しられる」の派生を阻止している。  
(影山 1993:182-183)

本章で論じている複合語はちょうどこのような「語彙の阻止」が起こっているのかもしれない。たとえば、「上げ下げする」があるため、「上げ下げる<sup>11</sup>」といった動詞形を用いる必要がなくなる可能性も考えられる。このような一般原則から考えれば、「上げ下げする」「拾い読みする」「押し売りする」のような語が動詞的に働くことが当たり前なのである。本稿では、(C) (D) には動詞形がないため、このような現象が生じたと考えるが、最も重要なのは、この類の語の内部には、どのような意味特徴を持っているかである。以下、その意味特徴について探っていく。

### 5.2.3 「泣き笑い」の意味特徴

「泣き笑い」は(C)類である。この類には「泣き笑い、伸び縮み、飲み食い、上げ下げ、乗り降り」などがあげられる。そして、その多くは「する」をつけて、動詞的に機能することができる。その意味の特徴について「泣き笑い」を例にして検討してみたい。辞書で「泣き笑い」を調べると、次の語釈が書かれている。

『日国』<sup>12</sup> [名] 泣いたり笑ったりすること。また、泣きながら笑うこと。泣いていながら笑うこと。

『大辞泉』 [名] (スル)

1 泣きながら笑うこと。

<sup>11</sup> 「飛び降りる」を「飛んで降りる」に解釈できるように、「降りる」ことが意味の主要部になる。同格並列の「上げ下げ」を「上げ下げる」にすると、「下げる」が主要部に見えてしまうため、不自然になるとも考えられる。

<sup>12</sup> 『日本国語大辞典』(小学館)の略称である。



2 泣いたり笑ったりすること。悲しいこともうれしいこともあること。「一の人生」

『大辞林』(名)スル

[1] 泣きながら笑うこと。

[2] 泣くことと笑うこと。悲しみと喜び。 一の人生

3つの語釈が示すように、「泣き笑い」は「～たり～たりする」という意味合いを持っている。つまり、「動作性」が潜在していると考えられる。この特徴があるため、(C) 類の語は「する」をつけて動詞として働くことができる。動詞的にも名詞的にも働くことができる動名詞である。

次に、実際の用例を通して検討してみる。

(33) 木立のことを書いた本を読んだ長老たちは、泣き笑いしました。

→ 泣いたり笑ったりしました。

→ 泣きながら笑いました。

(34) またしても涙があふれてきて、泣き笑いの表情がしわにきざまれた。

→ \*泣いたり笑ったりした表情

→ \*泣くことと笑うことの表情

→ 泣いていながら笑っているような表情

(35) その中の慶事ですから、めでたい環境の中で発表したいのでしょうけれども、庶民はその有象無象の中で、泣き笑いしながら生きていっているのです。

→ \*泣きながら笑って

→ 泣いたり笑ったりしながら

(33) のように、「泣き笑いする」が一つの述語として働くとき、その意味合いは(34)(35)と比べると、制限が少ないことがわかる。しかし、(34)(35)になると、その意味が限定されてしまい、「泣い



たり笑ったりする」に言い換える許容度が低下すると考えられる。ただし、(35)の「泣き笑いしながら生きていつている」は「泣いたり笑ったりしながら生きていつている」に言い換えられる。

谷口(2007)は、「読み書き」「行き来」のような対義的な2つの動詞の連用形から成る名詞的表現とその動詞的表現の違いを説明している。(36)の名詞的表現を動詞的表現に言い換えるすると、(37)のように言い表すことができる。

- (36) a. 漢字の読み書きは難しい。  
b. この通りは人の行き来が多い。  
c. 実家への行き帰りは飛行機を利用した。  
d. 試合の勝ち負けにはこだわらないようにしよう。  
e. 私は人とお金の貸し借りはしない主義だ。  
(谷口 2007 の例(16))

- (37) a. 漢字を読んだり書いたりするのは難しい。  
b. この通りは人の行ったり来たりが多い。  
c. 実家へ行くときも帰るときも飛行機を利用した。  
d. 試合の勝ったり負けたりにはこだわらないようにしよう。  
e. 私は人にお金を貸したり借ったりしない主義だ。  
(谷口 2007 の例(17))

(36)(37)を比べてみると、(36)の名詞的表現の方が(37)の動詞的表現よりもずっと簡潔で引き締まった言い方に感じられる。これら(36)のような名詞的表現は、動詞的な表現に比べ、こなれた定型表現として日常の日本語の中に定着していると指摘している。

### 5.3 形容詞・形容動詞として働くもの

村木(2002: 221)では、「動詞性語基が後要素として合成語をつくるとき、しばしば第三形容詞とみられる単語ができる。このタイプの第三形容詞は数が多い」と指摘している。上述の形容詞的なもの



と形容動詞には、「～たて」「～掛け」「～あがり」「～がち」「～過ぎ」「～っぱなし」の類の語が目立って多い。これらの語は接尾辞化して、多くの複合語を生み出している。この点について、村木（2002）は、これらをアスペクトの特徴によって分類している。城田（2002）では形態論的に、動詞連用形につく動作と形状詞を「アスペクト」（相）による記述をしている。このタイプの語が形容詞的な働きを持つ理由はそれぞれの「アスペクト」（相）にかかわっていると考えられる。以下、城田（2002）が提示した〔動作相状詞〕分類を参考にこのグループの語の特徴を観察していく。

A- 直前完了相（～たてだ）

（コトが完了したばかりであり、主体ないし客体は新鮮（稀に未熟）な状態にあることを示す）

「研ぎ立て、蒸し立て、焼き立て、取り立て」などが見られる。

(38) とりたての大根はどろを洗い流すと表面が光るのだ。

(39) 採りたての野菜が、こんなに美味いとは知らなかったヨ～

(40) 天知がちびちびとワインを飲んでいると、香澄が焼きたてのステーキを皿に盛って、運んできた。

B- 不完全起動相（～かけだ）

（始められたうごきが完全に進展しない状態にあることを示す）

(41) 悪気はないのだが—いくら心配してくれても、飲みかけの缶ビールを手にしたままでは、ありがたいより腹が立つ。

(42) まだ書きかけですから、原稿は送れません。(城田 2002: 170)

C- 旺盛継続相（～通しだ）

（主体が長期に渡っていささかの中断もなく同一のコトを行い続ける様子を示す）

(43) この日も夜までぶっ通しの取材が終わったあと、気晴らしがしたくなった私は、マッケンジーにナイトクラブかどこかへ行かないかと誘った。

D- 放任継続相（～っぱなし）

（～ッパナシはコトが持続される（ないし、多発される）が、持続（多



発)が放置される(とどめるものがない)ことを示す)

(44)「一失礼します」と、いつも開けっ放しの玄関から、竜野は声をかけた。

(45) 前に実家の時は開けっ放しだったから勝手に出入りできたのに～～と呟いてましたよ。

(46) 流しに食器を置くと一目散に走りだして、開けっ放しの勝手口から外へ出る。太陽がぎらっと光って目がくらんだ。

#### E- 過剰相 (～すぎだ)

(コトが標準的な姿を遥かに超えて行われることを示す)

主体の多さ、客体の多さ、主体・客体の参加の程度ないしコトの遂行の程度が標準的な姿を遥かに越えて行われるというかたちで過剰な事態が表現される。(47) (48) (49) (50) のように、「～すぎ」は形容詞的に働き、その同時に本来の「動作性」を失い、「～過ぎの+N」のように用いる。

(47) スコアー・・・八十八リリースポイントが安定せず、良い時と悪い時の差が出すぎです。

(48) まず第一に、調査報告にあるようなゆきすぎの再発を防ぐ制度的な保障がないこと。

(49) ベトナム戦争だの、精神の荒廃だの、物質文明のゆきすぎだのと屁理屈をこねることはない。答えはたやすい。

(50) 出すぎの(な) 渋いお茶。(『大辞泉』)

#### F- 完成相 (～あがり)

(コトの完成・完了の様々なニュアンスを伝える)

「病上がり、出来上がり、染め上がり」がある。

(51) 一行は、病みあがりの体力のない隊員をまじえていたので何度も休憩をとらねばならなかったのです。

(52) しかし、目の前に見る小佐野は、まぎれもなく病みあがりの老人だった。

(53) GDP のなかで六割を占める消費行動に反乱が起こったわけですから、たださえ病みあがりの日本経済はひとたまりも



ありませんでした。

#### G- 傾向相（～がち）

（～する傾向を持つという意を示す）

- (54) 経験の少ない選手にありがちなことだが、意識を過去や未来に揺らがせてしまうのは、プレーに集中できていない証明だといえる。
- (55) 気が小さくて欲張りな男にありがちな性格だったが、自分の責任を今度ばかりは自分で取らなければならない。
- (56) 私たちはそのありがちの事柄の中からも人生の淋しさに深くぶつかってみることができる。
- (57) 売り注文と買い注文を間違えるとか、数量欄と金額欄を間違えるとか、数字の桁を間違えるなどは、ありがちの間違いですので、注意しましょう。
- (58) 自分の生活に大きな影響を及ぼす立場にいる人に不公平に扱われたと感じたとき、気が気でなくなり、その人を自分の生活の中心においてしまうことはありがちである。

以上の用例からわかるように、これらの語には「ある状態、様子、傾向」などの「相」が含意されているため、形容詞的な性質（属性）が生じたと考えられる。この点は、「動詞連用形＋動詞連用形」型の複合語が形容詞化する仕組みの特徴だといえる。

#### 5.4 副詞として働くもの

副詞として働くものには、「取り分け、起き伏し、生まれつき、折折、引き続き、思い切り、折り返し、取り返し、割合、懲り懲り（こりこり）、懲り懲り（こりこり）、洗い浚い、繰り返し、」の13語があった。いくつかの用例をあげておく。

- (59) 今までにも喫茶店やカフェでこういったタイプのメニューはあったが、スターバックスの表現する楽しさと洗練されたデザイン性はとりわけ印象的だ。



- (60) 海は浜辺いっぱいにうねり押し寄せてきて、応答のない長い沈黙をしばらくつづけたあとで、ふたたびその嘆きをくりかえし訴える。
- (61) 獣医師に診せたところ、生まれつき胃の出口が狭く、食べたものが落ちていかない。
- (62) 素早く袋の口を縛り、思い切り壁に叩きつける。
- (63) トンマーズ・ブシェッタには必ずしも、組織の秘密をあら  
いざらいぶちまけてしまう気持ちがないということが、ボスたちにもわかってきたのである。
- (64) 門前仲町の美濃屋の旦那に言い付けられやした」男の名は甲吉、町人は美濃屋策次郎、昨日から左近を尾行していたことなどを洗い浚い白状した。
- (65) つぎには金銭関係を洗いざらい調べました。危険分子との交友関係を嗅ぎつけようとすりました。

そのうち、「とりわけ、くりかえし、あらいざらい」は副詞として使われる場合はひらがな表記が多い。また、「懲り懲り」（こりごり）は、辞書では[形容動詞][副詞（スル）]と示されているが、実際に「懲り懲りする」の例はなかった。ほとんど（66）のように、「もう懲り懲りだ」の形で使われている。

- (66) 翌朝、二人とも北君に奢るのはもう懲り懲りだとか言って  
すげなく帰って行ってしまった。

## 5.5 促音が両要素の間に入っているもの

本稿における（F）類（「V2 っ + V2」といった語形で表しているもの）には、「明けっ放し・開けっ放し、搔っ払い、切っ掛け、突っ込み、突っ張り、取っ付き、引っ掛かり、引っ越し、引っ込み、ぶっ続け、ぶっ通し、遣りっ放し、酔っ払い」などがあげられる。「取っ付き」と「取り付き」<sup>13</sup>を『大辞泉』でその意味を確認すると、ほ

<sup>13</sup> 『大辞泉』では、次の解釈をしている。  
とっ - つき【取っ付き】1 最初。手初め。「習い事は一が肝心だ」2 いくつかあ



とんど意味が変わらない。また、「開けっ放し」と「開け放し」も意味はほぼ同じである。「～っ放し」は「接尾辞的」な用法で、「～放し」より口語的な感じがある。この類の語には、[名詞]（引越し、突っ張り、酔っ払い）になるものもあれば、形容詞化（開けっ放し、ぶっ通し）の現象もある。このような語の内部には「促音（っ）」が入っているため、「強調」と「程度」の意味が生じていると考えられる。

## 6. まとめ

以上、語構成と品詞の観点から「動詞連用形＋動詞連用形」の意味・用法について考察を行った。そして、それぞれ異なった品詞に転じて働くことを意味的、統語的に分析を試みた。結果は次のようにまとめられる。

- ① 動詞形のないものは動詞形のあるものより、動詞化しやすい。とくに「泣き笑い、上げ下げ」のような語は述語として働く場合は、「～たり～たりする」といった意味的特徴があるため、動作性が生じて動詞的に働きやすくなると考えられる。
- ② 修飾関係にあるものには、「摘み食い、切り売り、拾い読み」などがあげられる。これらの語には、意味の特殊化が多く見られる。また、「する」をつけて述語として働くときに、意味がさらに合成し語彙化されるため、その対象が述語とどう関連付けられるかが重要になってくる。
- ③ 形容詞的に働くものには、動詞形のあるものと動詞形のないものはそれほど差がないが、後項要素がアスペクトと関連している場合は、形容詞化しやすい。これらの語には「ある状態、様子、傾向」

---

るうちのいちばん手前。「角を曲がった一の家」3 初めて会ったときの印象。第一印象。「一はよくないが、根はいい人だ」  
とり-つき【取（り）付き】1 物事のはじめ。とっかかり。とっつき。「商売の一から挫折する」2 道などが始まる場所。とばくち。とっつき。「登攀(とうはん)ルートの一」3 人から受ける最初の印象。とっつき。「一の悪い人」



などの「相」が含意されているため、形容詞的な性質（属性）が生じたと考えられる。この点は、「動詞連用形＋動詞連用形」型の複合語が形容詞化する仕組みの特徴だといえる。

- ④ 形容動詞として働くものには、「～の／～な」の二通りの形が見られる。たとえば、「ありがちの／な」「在り来りの／な」である。なお、「懲り懲り、散り散り、離れ離れ、並々」のような連用形重複形もある。
- ⑤ 副詞の用法は少数に限られ、13語しかなかった。そのうち、「とりわけ、くりかえし、あらいざらい」は副詞として使われる場合はひらがな表記が多い。

このように、「動詞連用形＋動詞連用形」複合語は、いろいろな品詞に転成することができる。

今回の考察対象には連用形重複形のものは少数しかなかったが、この類の語の特徴も明らかにする必要がある。なお、派生名詞とそのもとの動詞形の意味的相違については触れなかった。それらの問題については、今後の課題としたい。

## 参考文献

- 石井正彦『現代日本語の複合語形成論』、東京：ひつじ書房、2007
- 影山太郎『文法と語形成』、東京：ひつじ書房、1993
- 影山太郎『ケジメのない日本語』、東京：岩波書店、2002
- 国立国語研究所『教育基本語彙の基本的研究－増補改訂版』、東京：明治書院、2009
- 嶋田裕司「日本語の複合動詞と複合名詞の意味的相違」『横浜市立大学論叢 40－3』、1989、165-219 頁
- 城田 俊『日本語形態論』、東京：ひつじ書房、2002
- 鈴木重幸『日本語文法・形態論』、東京：むぎ書房、1972
- 玉村文郎「現代語における居体言」『花園大学研究紀要』 vol.1、京



- 都：花園大学文学部、1970、121-144 頁
- 玉村文郎『日本語教育指導参考書 13 語彙の研究と教育(下)』、東京：大蔵省印刷局、1985
- 谷口秀治「動詞連用形の用法について」『大分大学留学センター紀要』第 3 号、2006
- 谷口秀治「動詞的な言い方と名詞的な言い方」『大分大学国際教育研究センター紀要』第 1 号、2007
- 長嶋善郎「複合動詞の構造」鈴木孝夫（編）『日本語講座』第 4 巻、東京：大修館、1976
- 西尾寅弥「動詞連用形の名詞化に関する一考察」『国語学』43、1961  
『現代語彙の研究』、東京：明治書院、1988、54-84 頁
- 野村雅昭「語構成」『日本語と日本語教育のための日本語学入門』、東京：明治書院、2010、49-62 頁
- 村木新次郎「意味と品詞分類」『国文学解釈と鑑賞』1 月号、東京：志文堂、1996、20-30 頁
- 村木新次郎「名詞と形容詞の境界」『月刊言語』vol.27 No.3、東京：大修館書店、1998、44-49 頁
- 村木新次郎「「がらあきー」「ひとかどー」は名詞か、形容詞か」『国語学研究』39、宮城県：「国語学研究」刊行会、2000、80-71 頁
- 村木新次郎「第三形容詞とその形態論」『現代日本語の文法研究』第 10 集、東京：明治書院、2002、211-237 頁

付記：

審査の段階で、匿名の査読者の先生方より大変有益なコメントをいただき、ここに記して深く感謝の意を表したい。なお、本稿は行政院国家科学委員会の研究助成(助成番号 NSC 101-2410-H-031-055-)による研究成果の一部である。